

---

# 君と約束

あららぎ慎駒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と約束

### 【著者名】

あらいりあい 懇駒

### 【ISBN】

N4155B

【あらすじ】  
楽しみにしていた、彼女と過ごす連休を。なのにそれは、最悪の日に変わりそうだ。

「あの、『ごめん。今度の連休、仕事入っちゃったんだ。ミスがつて修正に時間がかかりそうなんだよ。せつかく予定してたのに…』ホントごめん。」

「そつかあ、残念だけど仕方ないよね。」

「ごめんと何度も繰り返す僕に、彼女は気にしなくていいよ、と笑顔を見てくれた。

「3日とも仕事？」

「たぶん。」

「夕飯作りにこようか？どうせコンビニ弁当なんでしょう？休み無しで仕事して、帰ってからまともなご飯食べなかつたらすぐにバテちゃうよ。」

彼女の心遣いは嬉しかった。

そのまま僕は、彼女の言葉に頷けばよかつたんだ。それなのに素直に甘えられない自分がいた。

「いいよ、わざわざ来てもらひなんて、これ以上迷惑かけれないし。」

「全然迷惑なんかじゃないよ。私が來たいから来るの。」

彼女は机越しに身を乗り出して、僕の顔を覗き込んだ。その小さな顔に大きく、ダメ？と書かれているのがはつきりとわかった。

「第一、いつ帰れるかもわからないんだから…遅くもなるだろうじ。」

「じゃあ、待ってる。」

「そこまでする必要無いよ。ちょっと休みが無くなつたくらいで、すぐにバテたりなんか絶対しない。」

僕なりにいろいろと考えて話していたのに、どうも全くの逆効果だつたらしい。僕が話せば話すほど、彼女はうつむいてしまつ。どうしていいのかわからない。気まずい雰囲気だけが部屋中を満たして

いた。

「コーヒーでも入れてこようか？」

少し気分が落ち着けば、と思って発した苦し紛れの言葉も、また空回りしたあげくに……彼女に最後の一撃を与えただけだった。

「バカッ！！」

その言葉を合図に、クッションや枕、その他彼女の手元にあつたものが次々と投げ付けられた。僕はそれら全てを全身で受け止めた。そうしかできなかつた。

投げるものが無くなると、彼女は目に涙を浮かべて勢いよく立ち上がり、

何も言わず部屋を飛び出して行つた。

あれから五日……彼女からのメールも電話もない。

なぜ、あんなことになつてしまつたのか未だに解らないまま。今日がその連休の始まりなのに。一人で考えても何もわからない。人に相談することでもないし、答えは彼女しか知らない……。

仕事帰り、駅まで歩きながら、まだ、答えを見つけるために考え続けていた。自分なりのなつとくできる答えを見つけない限り、何も変わらない気がしたから。

このまま終わってしまうのは怖い……。

あの日の事を思い出しながら、電車の中でも考え続けた。20分ほど考へると、一つの答え……結論に達した。

彼女のあの時の心情を考える事は出来ても、それはあくまで想像でしかないのだ。これだけ考へても答えは出せなかつた。今僕は想像を膨らませるよりも、思い切つて彼女と話をすべきなのかもしねい。そんな勇氣も無いけれど……。

上着のポケットから、使い慣れた携帯電話を取り出し、時計だけ見て強くそれを握つた。

電話もメールも簡単なはずの事が、今は何よりも難しい。

立ち止まつて、進み続ける時計をじっと見ていた。

少しすると、急に辺りがうるさくなつた。……雨だ。

予想外の強い降りに僕は慌てて走り出した。携帯電話を握つたまま、何も考えずに、ただ家に向かい走つていた。

アパートに飛び込み、息を整えながら、携帯電話のサブディスプレイで再度時計を見る。

しかし、時計よりも着信があつた事を知らせるメッセージの方が先に目に入った。

彼女からだつた。

息を切らしたまま電話をする氣にもならないし、増してや自分からかけ直す勇気もない。

もう終わりだ……そんな気分だつた。気付かなかつたとはいえ、五日ぶりの彼女からの電話を無視したのだから。

溜め息をつきながら、とぼとぼ階段を昇つた。

「雨……降つてたんだ……。電話、気付かなかつた？」

それは突然の事だつた。

聞き慣れた声……少し緊張して掠れているようにも聞こえるけれど、紛れも無く彼女の声そのものだ。どうして彼女が僕の部屋の前に居るのか解らなかつた。もしかして、終わりを告げるために?それとも……?

「約束、」

「約束……?」

不意に僕は聞き返していた。

僕は何を約束した?どんどん解らないことが増えていく……。

「ご飯作りに来るつて、私、言つたよね?まともなご飯食べなかつたら、体壊しちゃうからつて……。」

情けなかつた、僕自身が。社会に出て一人前になつたつもりでいた僕が、年下の、まだ学生の彼女に心配ばかりかけていた。

僕が逃げていた事にも、彼女は真正面から立ち向かつているんだ。こんなまっすぐで力強い彼女に僕は惚れたんだろうな。ふとそんな

事を考えていた。

「ごめん……何にもわかつてあげられなくて。」

「今はちゃんとわかってるの？なんで怒ったのか……。」

「…………ずっと考えてた……でも、わからなかつた……。」

「やつぱり、そうだと思った。私は来たかつたから来たんだよ、今も。迷惑ならもう来ない。でも、そうじやないなら来てもいいでしょ？私、あなたのために出来ること少ないし……だからこそ、少しでもやれることはやりたい。…………やつぱり……迷惑……？」

僕はゆつくりと首を横に振つた。迷惑なはずが無い。

「ありがとう。」

その言葉に彼女は、温かな笑みを返してくれた。五日ぶりにほっとした気分で充たされている。体の中の邪魔なモヤモヤ感が一瞬にして消えていくのがわかる。

「あ……ベタベタだよね？早く着替えないと風邪ひいちやう。」

いつもの優しい彼女が、今、僕の目の前にいること……たつたそれだけの事なのに、誰よりも僕は幸せものなのだ、と思つてしまつ。本当にありがとうございます。

部屋に入つてすぐ、僕は彼女に触れるだけのキスをした。

### (後書き)

日常の中にある幸せを書いてみたつもりなのですが、いかがでしたでしょうか？しつかり者で素直な彼女と新米社会人の僕、私の理想が反映されてる気もします。

まだまだ小説初心者なので、頑張っていきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4155b/>

---

君と約束

2010年10月8日15時17分発行